

# 速疾成佛の思想

横 超 慧 日

速疾成佛とは、速かに成佛したいといふ願望があり、その願望に應じて又人を速かに成佛せしめる教法があるとすの信仰をいふ。この信仰は後世中國や日本で頗る重んぜられ、即身成佛とか即得往生などの説となつて發展したが、それが中國で興つた初は南北朝時代であり、その時代には凡そ次の如き三種の様相を示したと考へられる。即ちその第一は頓悟漸悟の争に發端して速疾成佛を説く無量義經といふ經典の形態を以て先づ發表せられ、次に淨土へ往生することとは速疾成佛の道なりとして曇鸞の淨土願生の信仰に根據を與へ、最後に衆果一時に具足する法華三昧の修習といふ行法を通じて圓頓圓融の思想を發生させた。これらの思想は相互に關連しつゝ起つたものである。茲にその起源及び發展の過程を跡づけてみようと思ふ。

## 二

速かに成佛することを願ふ爲には、その前提として先づ何人も悉く成佛し得るといふことが豫め承認せられてゐなければならぬ。萬人の成佛が明確でないならば、成佛すら不確かなものが更にその速かな達成を願ふといふことは、到底考へられないからである。そこで一乗成佛を説く法華經と悉有佛性を明かす涅槃經とは、速疾成

佛の思想が興るための基盤をなすものと言へるのであつて、羅什譯の妙法蓮華經と法顯覺賢共譯の六卷泥洹經と曇無讖譯の大般涅槃經とが時を隔てず相次いで翻譯せられた事は、まさに速疾成佛思想が興起するについて第一の礎石を置いたものと言つてよい。妙法蓮華經は竺法護譯正法華經の重譯で、一經の趣旨を領解させるに足る達意的流暢さを以て翻譯せられた。譯者羅什は大小乘の經論に通じ、深い學識を以て歸趣を見出すべく一世を指導した。更に教界には道安・慧遠によつて培はれた求道の雰圍氣がただよひ、興亡恒なき五胡の争亂と共に世相は佛教を單なる清談の具としておかせなかつた。かうした時に、佛性といふ新しい課題を持つた泥洹經が、入竺求法者法顯によつて東晉の都建康に傳へられ、それより十餘年の後にはその異譯たる大般涅槃經が傳はり再治されるといふ事態が起つた。成佛といふ考方はかかる背景に於て擡頭したのであり、我々はその最初の現はれを僧叡と竺道生との上に見出すことが出来る。

六卷泥洹經が翻譯された時、此を疑つて信受せぬ者があつた。中興寺の僧嵩は佛の常住なるを否認し(高僧傳卷七道温附傳)、その弟子彭城の僧淵は涅槃を誹謗したと云はれる(出三藏記集卷五小乘迷學竺法度造異儀記)。僧叡はこの泥洹經に對する謗法を敷じて喩疑一篇を作つたのであるが、その中で彼は明白に一切衆生成佛の説

を表明した。僧叡の見解の要旨は次の如くである。(一)法には優劣なく、隨宜の旨を體得すれば佛の教は皆眞實である。(二)但し法に優劣はなくとも悟り方如何によつて深淺が分れるから、前には小乘を執じて大品や法華を信ぜぬ者があつたが、今又泥洹經についても之を諍るものが現はれた。(三)然し大品・法華・泥洹の三經は大乗の無上眞實なる教であつて、そのことはこれらの經に皆神驗奇瑞があつたので疑ない。(四)師の羅什は曾つて、「佛は虛妄であるはずがない」と言ひ、「又法華より推せば當然、一切衆生皆當作佛を説く經があるべきはずだ」と説いたが、その言は今この泥洹經の出現によつて實證された。(五)今の泥洹經を疑ふ者は、皆有佛性といふ説は眞照に通ぜぬものとなすであらうが、苟くも眞照を云ふ限りその根柢に不變の本たる眞性の存在するを認めねばならぬ。泥洹經はその眞性を説くのであるから、此を疑つて眞照のみを執ずるといふのは考方そのものに誤がある。僧叡の意見は大約右の如くであつた。これによつて見れば、羅什が既に法華の開佛知見の語より一切衆生の成佛を推論してをり、僧叡はその教を受けてゐたから、悉有佛性の明説せられる泥洹經に接して愈々悉皆成佛の信念を固くしたことが知られる。彼はこれより前、般若と法華との相待關係を考へてゐた（法華經後序、小品經序）。今又般若と泥洹、法華と泥洹との關連を開明して、結局、「般若は其の虛妄を除き、法華は一究竟を開き、泥洹は其の實化を闡く、この三津開照して、照、遺すなし」（喻疑）と説き、組織的な佛教學の體系を發表するに至つてゐる。かくして泥洹經の誹謗者が現はれたといふ事件が、却つて單獨な理解を教義的な組織にまで昂めさせる機縁となつたのである。

## 三

僧叡が成佛といふ課題に對して明確な意識を持つたこと前述の通りであるが、更に一步を進めて悉皆成佛より速疾成佛の方向に近づいたのは竺道生であつた。彼に於ては、闍提成佛を主張して佛教徒の腦裏に成佛といふ考方を深く刻みつけたこと、法華の一乘といふ教説に明快な理論を與へたこと、進んで頓悟といふ問題を提起して時代思想を振起させたことが注意せられ、これらが皆速疾成佛の思想につながりを持つてゐたのである。六卷泥洹經が譯された時、經文には闍提不成佛と説かれてゐるに拘らず、悉有佛性の原理より推して道生は敢然闍提成佛を主張した。これは守文の學徒より背經の邪説として非難されたが、後に大般涅槃經が傳はつてその經説に合することが明かとなつた（出三藏記集卷十五、道生傳）。この話は彼の明敏さを示すものとして古來喧傳せられてゐるが、私はそれよりも、寧ろこの事件が悉皆成佛といふ觀念を深く世人の念頭に浸透させる機縁となつたであらう意義に留意したい。一闍提は信不具足の故に斷善根とも稱せられ、絶対にこれだけは成佛を許し得ぬ所と排撃せられた極限の者である。然るにかかると一闍提すら成佛が認められるとなれば、凡そ世の中に何一つとして成佛の障となるものがないであらう。然かも一闍提とは、宗教的に反省する時何人も直面しなければならぬ自己の姿ではないか。されば闍提成佛が單に經の上に説かれてゐるといふだけでなく、即ち、涅槃經自身も既に苦慮した末にそこに到達したのであるが、恰もそれと同様に、中國佛教徒も無自覺無反省に經説を領受するのでなく、些かながら道生のこの事件を通して自覺的に受け容れたといふことになる。これは中國佛教の上に成佛思想を考へる場合、決して看過出来ぬ意義を持つ問題であつたと思ふ。

次に法華經は、般若等の諸經に於て不成佛の機とせられる二乘に對してそれが成佛の可能なるを説くのであるから、この經が説く一乘といふ原理は最も慎重に考究されねばならぬ。竺道生はこの法華經に注釋を作つて一乘の意義を明かにした。彼によれば、法華經は、一毫の善より佛慧に至るまですべての善は皆一の佛果に統攝され、それは理が唯一なるに由ることを説くものであると云ふ。これによつて、佛は先に三乘を説き後に一乘を説かれたが、實際には因果人共に三乘の別なく唯一種あるのみといふことになる。聲聞・緣覺等が成佛せぬといふのは方便の教を執してそれを實説と謂つてゐる迷情の上に於てのみ云はれる所であり、決して一旦阿羅漢や辟支佛になつてその上で廻心して菩薩になるといふのではない。何人も佛敎を奉ずる限り初から皆菩薩と云はねばならぬ。従つて一切衆生の成佛は疑を容れぬのであつて、唯だ平等大慧を得るか否かが佛と衆生とを區別する限界となるのである。

以上の如く、理は一なるが故にこれを悟る平等大慧を得るか否かによつて佛と衆生とが分れるとすれば、悟は階段的に逐次悟つてゆくといふことで達せられるものと云へない。茲に所謂頓悟義が成立する。故に竺道生の頓悟義なるものは、法華經の一乘よりする當然の歸結と考へられる。尤も謝靈運の辨宗論が傳へる所によれば、道生は釋氏の積學能至説と孔氏の理歸一極説とを折衷して、宗極は微なりと雖も一悟頓了すといふ頓悟義に到達したと云はれる。然し道生は現に法華疏の中で、理無異趣同歸一極を以て法華に明す平等大慧の謂なりと明言してゐるから、頓悟義が一理に基くこと謝靈運の説く通りであるとしても、それが儒敎の説に負ふ所ありといふのは正確な論と思はれぬ。恐らく頓悟義を儒佛二敎に通ずる公論として

發表せんが爲に、謝靈運等がことさら左様に表明したのではなからうか。それは兎も角、道生によれば何人も一理を悟ることによつて頓悟成佛するのであり、その場合頓悟は、頓悟以外の道即ち漸悟の道もあつてそれに對して頓悟の道があるといふのではない。凡そ悟るといふのは唯一絶對なる理を悟るのであるから、此を漸次分割的に悟るといふことはあり得ない。故に悟りは頓に悟る以外にあり得ないのであつて、選擇の及ぶ所ではない。然しこれを敎説といふ面から見れば如何。華嚴經には十地の階級を説き般若經には三乘の差別を立てる。それらの經よりすれば、菩薩は地々の修行を積み聲聞は菩薩となつた上でなければ成佛することが出来ない。故にこれらの經と比較する時、三乘十地の別を説かず一悟頓了すれば一乘成佛すと説く法華經は、階級を経ず迂廻の道をとらずして速疾に成佛するの法を説く敎と云つてよい。法華經が速疾成佛の敎法と云はれる所以、又法華經に關連して速疾成佛の思想が起る所以は茲に在るのである。

#### 四

無量義經が中國撰述であつてそれが竺道生の頓悟義を證明せんために頓悟論者の側に於て編成されたと考へられることは、本誌前號（印度學佛敎學研究第二卷第二號）に發表した拙稿「無量義經について」の中で述べた通りである。この無量義經は自ら疾得成佛の法であることを大きな特徴としてゐる。即ち説法品に於て、「菩薩が疾く阿耨多羅三藐三菩提を成じたいと思ふならば如何なる法門を修行すべきか」と大莊嚴菩薩が問ふたのに對し、佛は「それは無量義と名くる法門である」と答へて、無量の義は無相の一法より生ずるから無相が實相であることを説いてゐる。而して如來が得道より四

十餘年の間は三法・四果・三乘・十地の行を説いてきたが、今説く所の法は疾成無上菩提の行なりと云ふ。故に成道四十餘年後の説たる無量義經のみが速疾成佛の法となるのであつて、それまでの間に説かれた聲聞の爲の四諦の教や辟支佛を求むる者の爲の十二因縁の教が迂廻の法たるは勿論、般若や華嚴等も疾成の法ではなかつた。經は明白に法華經を知つてゐるに拘らずことさら法華の名を擧げずして、「次に方等十二部經摩訶般若華嚴海空を説いて菩薩の歴劫修行を宣説せり」と云ひ、方等・般若・華嚴を歴劫の行としてゐるのである。

然し歴劫の行ではないと云つても、速疾は地々の漸進と比較することによつて初めて知られる所であるから、經は菩提の大道道であることを自任しつつ又十地の名を借用する。例へば、この經を聞いて修行せば未だ初不動地を得ずと雖も煩惱を斷除して乃至得道すと云ひ、或は經を聞いて衆生を度せんとすれば生死煩惱一時に斷壞して菩薩の第七之地に昇ると云ひ、或は又この經を受持し人を勧めて修せしめる者は漸見超登して法雲地に住せんと説く等、皆その例である。このやうに速疾を云ひながら然も十地の別を借り用ひてゐることは、後の曇鸞との關係に於て注意される點である。

次に無量義經が十功德品に於てこの經の十種不思議功德力を擧げ、速疾成佛を經力として鼓吹してゐることも注意さるべきであらう。本來ならば無相の理を悟ればそれによつて成佛するのであるから、無相の理を悟ることこそ尊ばるべきであるが、無量義經は「その道理を明かすのはこの經のみである」といふ觀點より、この經の威神力を強調する。そして經の最後には、大莊嚴菩薩等が、「我等當に願力を以て一切衆生に此の經を見聞して是の經の威神の福を得

せしむべし」と誓つてゐる。このやうに速疾成佛を自己の力とせずして經力に負ふものとする事、これ又後の曇鸞と關連ありと云へないであらうか。そこに他力思想の萌芽を見出せるやうに思ふ。

尙無量義經を初めて世に紹介した劉虬の無量義經序については、前述の論文で既に論考した通りであるから、茲には再論することゝ止める。

## 五

北齊の曇鸞は中國淨土教の歴史上劃期的な地位を占める存在である。彼が天親の無量壽經論に對して加へた註釋は、佛の願力に乘じて凡夫が淨土に往生するといふ趣旨を、初めて而も強力に信念を以て發表した點に於て、佛教信仰のすべての形態の中でも最も異彩を放つものである。然し從來はその思想の由來が、社會情勢若しくは彼自身の個人的な面にのみ求められて、佛教學一般とのつながりを考慮するといふことが殆どなされてゐない。私はこの稿が些かでもその闕を補ふ上に役立つならば幸と思ふものである。

天親の無量壽經論は、願生偈の中に、「佛の本願力を觀ずるに遇うて空しく過ぐる者なし、能く速かに功德の大寶海を満足せしむ」とあつて、功德の速かなる満足が佛の本願力に由ることを示してゐる。それ故に長行の最後に入五門を明した際、論には、「是の如く五門の行を修して自利利他し速かに阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得るが故に」とあるのも、行者の自利と利他との二行が具備するから速得成佛すといふのではなく、佛の自利利他二行によつて衆生の速得成佛が可能にされるべきであらう。曇鸞がここに文を解するに當つて、「然るに曠かに其の本を求むるに阿彌陀如来を増上縁となす」と云ひ、かの淨土に生まれることもかの菩薩人

天所起の諸行も皆阿彌陀如來の本願力に縁ることを明かにした。即ち淨土に生まれることも淨土に於てなす菩薩行もすべて佛の願力によるものであつて、それ故にそれが速得成佛の法となり得るのである。彼はこれを證明する爲に、法藏菩薩の四十八願中の第十八・第十一・第二十二の三願を引用した。所謂三願の證と稱せられ宗學者の古來最も重視する所である。今その詳説は畧するが、要するに念佛往生の故に三界の輪轉を免れ、住正定聚必至滅度の故に廻伏の難なく、超出常倫の故に諸地行現前して歷別修行の必要がない。これによつて速疾に成佛すといふのである。然らば淨土へ往生するといふは畢竟速疾に成佛するの道であつて、それ故にこそ往生を願ふといふことになる。第十八願によれば三界に於ける輪廻が免れる。第十一願によれば二乘に退墮することがない。第二十二願によれば菩薩の諸地を漸次に修行して上る必要がない。この三種の障礙なき所に速かな成佛が可能となるのであるから、此を二乘迂廻と菩薩の歷劫修行とを否定せる無量義經に比較すれば、これは淨土への念佛往生が加はつた點に於て特色のあることが知られるであらう。而して無量義經ではそれらを經力により此の土に於て到達せられる所としたのに對し、今は往生まで含めてすべて佛の願力とした所に相違はあるが、經力と云ひ佛の願力と云ひ共に行者の自力とせられてゐない點に於て一致する。

然らば曇鸞は無量義經を知つてゐたかどうかといふことが問題になる。これについては無量義經を引用してゐる所はないけれども、劉虬の無量義經序の文を引用してゐるので、當然經をも知つてゐたに相違ないと考へられるのである。即ち論註では下卷の觀佛莊嚴功德成就の八種相を釋する最末の文に於て、無量壽經の第二十二願を

速疾成佛の思想（横）

引いた後、「この經によつて推察するに、淨土の菩薩は一地より一地に至るといふことがないのであらう。十地の階次を言ふのは、釋迦如來が闍浮提に於てなされた一の應化道（一應の化道？）に過ぎず、他方の淨土も必ずさうとは定まらない」と云ひ、智度論卷十一に出づる好堅樹の譬を引いた後で次の如く述べてゐる。

有人聞釋迦如來證羅漢於一聽制無生於終朝謂是接誘之言非稱實之說聞此論事亦當不信夫非常之言不入常人之耳謂之不不然亦其宜也

然るにこの文は、劉虬の無量義經序に頓悟論者と漸悟論者との雙方の主張を述べた際、頓悟論者の立論中の一部として擧げられてゐるものであつて、そこには次の如く説かれてゐる。

而言納羅漢於一聽判無生於終朝是接誘之言非稱實、妙得非漸固固必然

その意味は、一たび聽法して阿羅漢が得られ一日の行で無生法忍が得られるといふ如きことは、これを誘引する爲の教で事實左様なことはあり得ないといふ人があるけれども、空を頓悟することが出来れば一聽して羅漢を得一日にして無生法忍を得ることも當然あり得べきことだ、と言ふのである。つまりこれは頓悟論者が漸悟論者よりの會通を反駁したものであつた。その漸悟論者よりの會通の部分を今曇鸞は借用して、速かに羅漢を得たり無生法忍を證したりすることを方便の説にして事實あり得ないことと考へるやうな者には、淨土の菩薩が諸地の差別を越へて速かに功德を満足するといふことが信ぜられないであらうと言つたのである。劉虬は悟のあり方を論じてそれは頓悟頓了でなければならぬと主張せんとしたが、曇鸞は悟りのあり方一般を問題にして頓悟義を主張しようとしてゐる

のではない。干地の階級を經る漸進主義の佛教もあることを認めながら、自らは不次第超越の佛教を淨土に見出して、その淨土への往生を願つたのである。茲に曇鸞の淨土教が劉虬を經由しつつ、頓悟義よりは寧ろ無量義經そのものの速疾成佛思想に影響される所があつたと考へられるのである。

註、曇鸞が東魏の興和四年に歿したとしても、劉虬はそれより三十八年前に死んでゐるから曇鸞が劉虬の序を引用することは不可能でなく、殊に曇鸞は陶隱居を訪ねて江南へ往つてゐるからその際無量義經を知つたと考へて不自然でない。

## 六

速疾成佛思想は、北魏北齊に曇鸞の淨土教を展開させた後、北齊の慧思に至つてまた法華經に立脚した三昧行として提唱せられることになつた。慧思は、釋論に依る修禪者慧文の下に學んだ後、一夏忽然として法華三昧を悟つたのである。此に至るまでの習學經歷を摩訶止觀や智者大師別傳には、「十年專誦、七載方等、九旬常坐、一時圓證」の要約した語を以て傳へられ、法華三昧證悟の過程は續高僧傳の慧思傳に詳しい。その證悟過程の記述に徴して知られるやうに、この三昧はもとは大乗の空定を發した後に到達されたもので、般若經に説かれる不可得空の悟境が徹底した結果であつた。故に慧思にあつては、法華と般若の二經は共に大乘直實の法を説いたものであり、何れも摩訶衍の義として互に優劣があるのではない。そのことは、彼が四十四歳の時に書いた立誓願文の中に、度重なる惡論師の迫害によつて末法惡世の叫を擧げ、正法としての二經を彌勒の世にまで傳持したいと誓つてゐるのでも知られる。唯不可得空なる實相の極處は般若法華二經同一であるけれども、そこに到る道

を般若經には次第行を以て説き、法華經には不次第圓頓行を以て示されてゐるの相違がある。即ち同じく大乘の不可得空を説くにしても、法華は二乗の路を行ぜず一心に此のみを學んで衆果一時に具足する佛果を成じ得るとなすのであつて、それは恰も蓮華の一華にして衆果を成じ一時に具足するが如くであるが、般若は此と異り三乘差別の上に立つて説くが故に次第順序を經なければならぬ。後に慧思が智頭をして金字の般若經を代講させた時、一心具萬行の處に至つて、慧思は「此れ乃ち大品次第の意のみ、未だ是れ法華圓頓の旨にあらざ」と教へたと傳へられる（續高僧傳）のは此を示すものである。思ふにこれ、その期する所の悟境は同一であつても、般若は此を説明的に論述し法華は直觀的に悟入させやうとしてゐるのであるから、行法としては法華による法華三昧でなければならぬといふのであらう。

慧思はこの法華三昧の思想内容を法華經安樂行義の中に表明した。それは末法の行法を説いた安樂行品と普賢勸發品とに準據し無相行と有相行との二種として説かれてゐるのであつて、有相無相の別はあつても共に法華經によるものである限り、それは大乘頓覺無師自悟疾成佛道の法であるといふ。速疾成佛が法華經によつてのみ可能とせられ、ここに妙法たる所以が認められてゐるのである。これから天台學の圓頓圓融の思想が興るが、その詳細は別の論文（宮本博士還曆記念論文集所載、拙稿「南岳慧思の法華三昧」）に譲る。尚、慧思は北齊の教界に學んだ人で、その考方には立誓願文に明かなる如く無量壽經に影響される所が多かつた。この點から疾成佛道の思想の流れを先輩の曇鸞にたどるとしても、敢て無理ではないであらう。